

アシステック通信

# ASSISTECH

2012

66号



県営住宅内の動作検証の様子（関連記事 P3）



駅の乗換誘導モデル事業（関連記事 P2）

## 目次

- P.1 ごあいさつ
- P.2 平成23年度 研究成果報告
- P.5 平成24年度 私たちの主な研究テーマ
- P.7 製品化に向けて
- P.8 研修クローズアップ 認知症介護の本質を問う研修
- P.9 福祉用具ミニ講座
- P.10 家庭介護・リハビリ研修センター課のご紹介
- P.11 アシステック掲示板
  - ・アシステック2012(研究成果発表会)開催
  - ・平成24年度ひょうごユニバーサル社会づくり推進大会・第20回福祉のまちづくりセミナーのご案内
  - ・ロボットリハビリテーションセンター公開シンポジウム
  - ・平成23年度報告集発行



## これまでとこれから

すゑだ おさむ  
所長 末田 統

昨年の東日本大震災では、障害の有った人々の死亡率が、障害のなかった人達の約2倍あったという報告があります。障害の有無にかかわらず、安全・安心の福祉のまちづくりは国民の願いです。未曾有の大震災と原子力発電所事故を契機として、これまでの社会システムのあり方を見つめなおす気運が高まっています。

経済性や快適性、更には快楽性を追求してきたグローバル資本主義、新技術指向社会の課題が、世界的経済不況連鎖の中で顕在化しています。

介護現場では、適切な支援や適切な福祉用具、それらを支える人材養成、限られた財源活用など、新たな発想での課題解決が求められています。「食の地産地消」同様、グローバル化だけでなく、「各地域住民それぞれの連帯意識の高揚と、心豊かな地域社会システムの構築」も今後の課題です。

「研究所は、県民の役に立ってなんぼのもの」との思いを胸に、人格と人権を大切にするプロの福祉人材養成と、まちづくり・ものづくりの研究活動、情報収集と情報発信を進めて参ります。

県民の皆様方からの、厳しくも前向きな叱咤激励をお待ちしています。



## はじめまして

くすはら かつのり  
次長 楠原 勝則

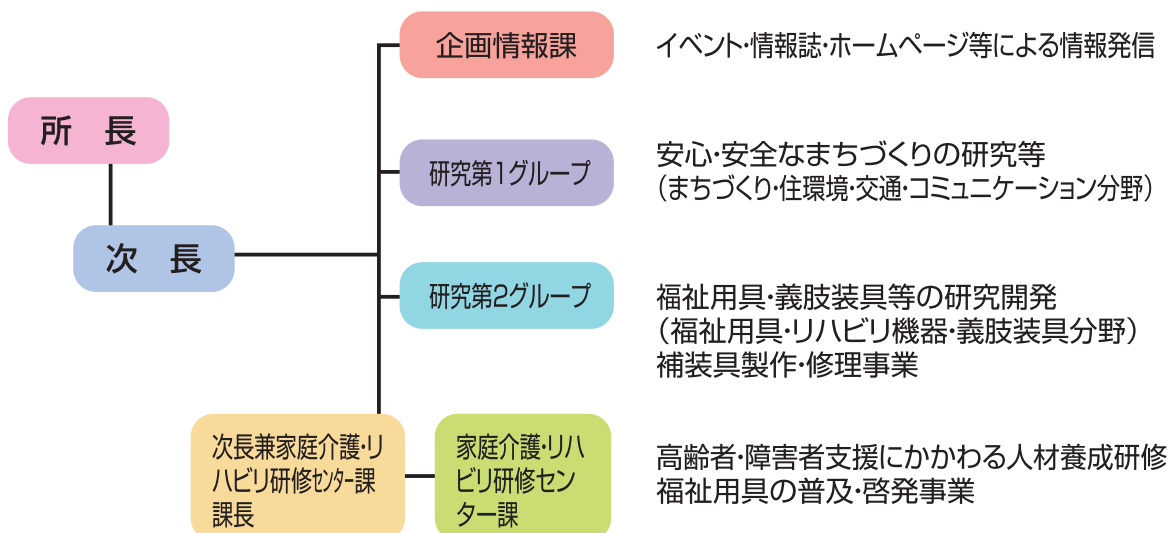
今年4月1日に「福祉のまちづくり研究所」次長を拝命いたしました。当研究所は、ノーマライゼーションの実現（障害者と健常者とは、お互いが特別に区別されることなく、社会生活を共にする）をめざして日々、研究を行っております。

キーワードはノーマライゼーションです。障害者と健常者の垣根なく生活できる社会を目指して、福祉のまちづくり研究所の立場から努力したいと思います。これまでの行政経験の中で培ってきた知識や感覚を活かして、研究所の活動に貢献していくことができたらと願っております。

これまで諸先輩が築いてきた業績を受け継ぎ、研究所のさらなる発展を目指して精一杯努力する所存でございますので、よろしくご指導、ご支援のほど、お願い申し上げます。



### 平成24年度福祉のまちづくり研究所の組織体制



## iPod touchやiPadを活用した知的障害児、 発達障害児のコミュニケーション支援事業

非常勤研究員 柏原 康徳

(現・神奈川リハビリテーション病院 工学技術員)

近年、情報通信技術（ICT）の進展にともない、スマートフォンやタブレット端末の普及が進んでいます。特に、タッチパネルの操作はシンプルかつ直感的なので、知的障害や発達障害のある人を支援するツールとしても注目が集まっています。そこで、知的障害児や発達障害児の日常生活における自立支援を目的として、iPod touchやiPadを活用した実践と、新たなアプリケーションの開発を行いました。

兵庫県内の特別支援学校や知的障害児施設をフィールドとして、各施設の教師や支援員の皆さんと活用場面や取り組み方を検討しながら実践を進めました。今回の実践では初めてiPod touchやiPadに触れた人が多く、試行錯誤しながらの取り組みでもありましたが、特別支援学校では授業場面に留まらず、学校生活と家庭との連携など様々な場面で機器を活用することができました。また、知的障害児施設では、支援計画を立てたコアメンバーだけでなく全支援員が関わって、コミュニケーション支援や余暇時間の中で機器を活用しました。これらの実践過程や考察は実践事例集にまとめ、県内の特別支援学校や知的障害者施設に無料配布しています。

さらに、実践と並行して各施設でニーズ調査を行い、「文章入力が困難でもシンボルを選ぶだけでメールを送信できるアプリケーション」や、「その場で撮影した写真を画面上に2つ並べて2択選択してもらうことでコミュニケーションするためのアプリケーション」を試作しました。これらのアプリケーションについては今後実用化を目指して試用評価を進めることを計画しています。



実践の様子

## 駅の乗換誘導モデル事業

主任研究員兼研究第1グループ長 北川 博巳

移動経路が複雑な駅の乗継ぎや乗換にはサインが重要です。高齢者は加齢に伴う身体、視覚および認知機能の低下で下方をみながら歩く機会も多く、路面を活用したサインも増えています。ユニバーサル社会づくり公共交通事業者部会（鉄道部会）で鉄道駅に路面誘導表示を設置することになり、デザインや設置に関する検討について、研究所が調査研究をすることになりました。

ロービジョンの方達の協力によるデザイン検討や関係各位との協議を経て、山陽電鉄明石駅とJR土山駅で設置しました。利用者へのヒアリングでは、混雑時に課題はありますが、高齢者層を中心に発見しやすく、理解のしやすいサインであるという意見が寄せられました。



## 高齢者の自立生活を支援する居住環境・地区のあり方に関する研究

— 高齢者の近隣居住支援に必要な計画の構築と提案 —

非常勤研究員 絹川 麻理  
(現・高齢者住宅研究所 研究員)

聞き取り調査を主な研究手法として、高齢過疎化地区の在宅高齢者を対象に受けている支援の状況、また、同地区の空き家を改修した一人暮らしが困難な高齢者のための共同の住まい(GL)を対象にGL居住者への支援や地区における支援の状況を把握しました。GLでは、母体事業所から近接した所にあることで、居住者に対して給食支給などの時間帯を軸として短時間の滞在の中で細やかな支援を行っていました。また、母体事業所に総菜屋を開設し、地区の高齢者へ弁当配達を行うなど面的に地区高齢者の食を支えていました。地区の高齢者は、支援の拠点が自宅から200m程度の範囲にある場合拠点に向き支援を受けていることや、支援者である地区住民も100m程度の近接した範囲では声かけやおすそわけなどを行っていました。結果として、小規模な空き家利用でも高齢者の近隣居住を支援できること、地区に有効に配置することで支援を面的に行えること、拠点やサービスの有効な展開の空間的情報がわかりました。

## 知的障害者の日常生活支援ハンドブックの開発

研究員 大森 清博

近年、障害者の地域移行が進められており、知的障害者の自立生活に向けた支援も強く望まれています。本研究では「朝起きてから夜寝るまで」の生活場面の流れに着目して、それぞれの場面でのどのような支援の工夫があるのかを整理した家族・支援者向けハンドブックの制作を目的として研究を行いました。最初に、生活場面として、起床・着替え・朝食・整容・排泄・洗濯・掃除・夕食・入浴・就寝の10種類を選び出し、それぞれに対して2～7項目の行動手順に整理しました。そして、文献調査や聞き取り調査などを行い、機器の工夫54例、環境調整45例、人的配慮46例を収集し、学識経験者や手をつなぐ育成会等と意見交換しながら「知的障害者の生活支援ハンドブック」として整理しました。



試作したハンドブック

## 県営住宅の住戸プランにおけるバリアフリー配慮の工夫に関する研究

特別研究員 室崎 千重

本研究は、県営住宅をより多くの人々が住み続けられる住宅ストックとするために、ユニバーサルデザイン・バリアフリーの視点から検証し、課題の整理とその要因を明らかにすることを目的としました。車いすユーザー+作業療法士+理学療法士+建築士のチームで県営住宅を訪問し、今回は車いすユーザーと片マヒの方に焦点を当てて動作検証を実施しました。検証の結果、現場対応の工事にバラつきが多く、使いにくい整備に繋がる要因のひとつであることがわかりました。改善案として、整備方法のルールづくりや施工業者へユニバーサルデザイン・バリアフリーの考え方を伝え理解してもらうことが挙げられます。また、居住者の身体状況に応じて住宅が柔軟に対応できるように、手すり下地を広範囲に入れておく等の新たな提案も行いました。今後、県担当課と協力して、具体的な改善を進めていく予定です。



動作検証の様子

### 高齢者・障害者の個別ニーズに対応した福祉用具等の開発

技師 中村 俊哉

本研究では、基本的な福祉用具では不十分な方のニーズに対し、福祉用具等の開発や改良等を行い障害者や高齢障害者のQOLの向上を図ると共に、生活者としての障害者の真のニーズを捉え、新たな機器開発につなげていくことを目的として実施しました。



静電容量式タッチパネル用貼り付け式外部スイッチ

- ①入力機能制限を用いた電動車いすの適合及び操作練習支援
- ②噛み込み動作による電動車いす制御ユニット
- ③電動車いす操作シミュレータ（仕組みを知るための教材）
- ④静電容量式タッチパネル用貼り付け式外部スイッチ

### 上肢運動機能リハビリテーションにおける訓練・評価手法の開発

非常勤研究員 李 虎奎

作業療法で行っているサンディング動作の訓練を手軽かつ客観的・定量的に評価する手法が求められています。本研究では、リハビリ病院などで通常行っているサンディング動作訓練を阻害しないで、上肢の運動計測が可能な装置の開発を行いました。本装置は計測後に、速度、動作距離、軌跡などを示すことが可能であり、また伸展・屈曲動作を行った時の被験者の動作の特徴を把握したり障害度を定量的に評価したりすることができます。

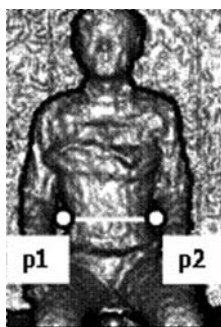


サンディング動作訓練の様子

### 高齢者・障害者のメタボリックシンドローム対策の研究

主任研究員 兼 研究第2グループ長 橋詰 努  
(現・東洋大学・帝京科学大学 非常勤講師)

メタボリックシンドロームの予防には、体重・腹囲・腹部脂肪率などを客観的に知り適切な運動を続けることが重要です。本研究では、車いすを使用したまま簡便に腹部脂肪率が計測できる方法を検討するとともに、簡易形状計測器を利用した腹囲・体型計測装置を考案しました。また、車いす上の左右重心移動で安全かつ楽しく散歩と同程度のカロリーを消費できる手法を提案しました。これらから、在宅・低コストでメタボリックシンドロームを予防することが期待できます。



形状計測



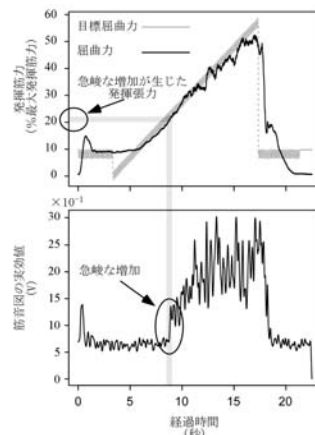
車いす上の運動

### 筋力トレーニングの定量的評価手法の開発

研究員 原 良昭

筋肉を構成する筋線維は大きな力を発揮できますが疲れやすい速筋線維と発揮できる力は小さいですが疲れにくい遅筋線維の2つに分類できます。筋肉が発揮できる力の性質は各筋線維群由来の筋力の割合によって決定されます。本研究ではトレーニングによって各筋線維群由来の筋力がどのように変化するかを、筋肉の収縮時に生じる皮膚の微小振動を計測した筋音図と呼ばれるものを用いて定量的に評価する手法について研究しました。

本研究では、トレーニング前後の筋音図の波形を比較することにより、トレーニングの初期では遅筋線維よりも速筋線維由来の筋力が増強することを示しました。



筋音図の波形と筋力の関係

※掲載している研究成果の詳細は、「平成23年度報告集」(P11参照)にまとめています。

**研究テーマ** 高齢者や障害者に配慮した公共交通機関に関する調査研究

主任研究員 兼 研究第1グループ長 北川 博巳



今年度は実際のバス路線を対象に歩行空間調査を行い、バス停の整理と評価、乗降客数や周辺施設の状況との整合性から見たバス路線の評価など、より利用しやすいバスのあり方について考えてゆきたいと考えています。

**研究テーマ** ICT機器を活用した知的障害児、発達障害児のコミュニケーション支援に関する研究

研究員 大森 清博



特別支援学校や知的障害児施設での iPod touch や iPad の活用実践を通して、施設に効果的に導入するための方策を整理すると共に、活用促進のための研修等を進めていきます。

**研究テーマ** 県民参加型の点検と助言による施設改善に関する研究

特別研究員 室崎 千重



地域の中で、誰もが豊かに住み続けられる住まい・まちづくりについてハード・ソフトの両面から研究をしています。建築専門の視点から、住宅改修や施設整備の助言もしています。

**研究テーマ** 盲ろう者の自立生活支援のためのインターフェイスと支援機器に関する研究 など

特別研究員 大西 俊介



知的障害者更生施設の支援スタッフ、生活保護ケースワーカー、障害者生活支援センターのコーディネーター(相談支援専門員)を経て、今年度4月より特別研究員として研究所に加えていただきました。これまでの経験を活かして取り組みます。どうぞよろしくお願ひします。

**研究テーマ** 駐車場コントロールによるまちづくりの研究 など

専門員 難波 健



今年度から研究の仲間に加えていただきました。この研究では、丹波地域を対象に高齢者等が暮らしやすい都市構造と交通の関係について都市生活学の視点での提案を目指しております。

**研究テーマ** 高齢者・障害者の個別ニーズに対応した福祉用具の開発

非常勤研究員 杉本 義己



マイコンを使った電動車いすの制御や環境制御装置、コミュニケーション機器の研究開発を行っています。昨年からはiPhone/iPadのアプリケーションも開発しています。

**研究テーマ** 小規模購買施設における利用者を理解したバリアフリー整備手法の提案

非常勤研究員 趙 玫姫



高齢化の進展の中で、ユニバーサルデザインやバリアフリーデザインが重要視され、より利用者のニーズに配慮した環境整備手法の確立が求められています。建築専門家・利用当事者・運営管理者を対象に、利用者のニーズに対する「気づき」を誘発・推進する仕組みについて研究しています。

**研究テーマ** 高齢者・障害者の地域居住支援に向けた地域公共交通に関する調査研究 など

非常勤研究員 天野 圭子



地域居住を継続するために必要な生活環境のうち、地域公共交通に焦点をあて取り組んでいます。特に、交通弱者として捉えられる高齢者・障害者の食料品購入、医療受診行動との関係に着目しています。

福祉用具・義肢装具等の研究開発 研究第2グループ

**研究テーマ** 脳卒中片麻痺者の三次元歩行シミュレーションに関する研究など



主任研究員 兼 研究第2グループ長 赤澤 康史  
(中央病院ロボットリハビリセンター兼務)

脳卒中の後遺症で歩きにくくなる人が多い中、より科学的な歩行分析やリハビリテーション手法の確立が求められています。計算機上のモデル歩行により障害を負いながらも楽な歩き方や装具の持つべき機能について主に研究しています。

**研究テーマ** 高齢者・障害者の個別のニーズに対応した福祉用具等の開発



主査(技師) 中村 俊哉  
(中央病院ロボットリハビリセンター兼務)

実際の相談事例の中から基本的な福祉用具では不十分な方の個別のニーズに対し、福祉用具等の開発・改良を行い導入することで、障害を持つ方々の QOL の向上を図ることを目的としています。

**研究テーマ** 変形性関節症者を対象とした異常歩行の定量的評価手法の研究など



研究員 原 良昭  
(中央病院ロボットリハビリセンター兼務)

変形性関節症の患者様の効率の良いリハビリテーションのために、人工関節置換術によって歩き方がどのように変化したかを客観的に評価する研究を医療従事者と共同で行っています。

**研究テーマ** 筋電義手練習支援システムに関する研究



義肢装具士 根本 和彦  
(中央病院ロボットリハビリセンター兼務)

筋電電動義手を使用するには、自在に筋電位出力を調節できることが必須です。本研究では、筋電電動義手の操作練習に用いる、筋電位波形を表示可能な義手一体型筋電位可視化デバイスの開発を行います。

**研究テーマ** 無線式身体動作計測評価システムに関する研究



一人に優しい筋電義手の開発等

特別研究員 本田雄一郎  
(中央病院ロボットリハビリセンター兼務)

福祉のまちづくり研究所ではリハビリテーション応用に、身体動作の簡易測定器を開発しており、ロボットリハビリテーションセンターではリハビリテーションと新技術を融合する研究開発を行っています。

**研究テーマ** 摂食嚥下リハ支援機器に関する研究開発



非常勤研究員 前田 悟

病院で摂食嚥下リハを行い退院した後では、誤嚥性肺炎の予防が問題になっています。医療従事者が少ない介護保険施設や在宅でも、誰もが安全に食事ができる機器の研究開発をしています。

**研究テーマ** 転倒・転落リスク評価指標に関する研究



非常勤研究員 李 虎奎

病棟看護師が全ての患者に均等に注意を払うことは負担が大きいです。看護師の業務負担を減少させる一環として転倒・転落リスクが高い患者の識別を行い、転倒・転落事故の予防を図る研究を行っています。



当研究所では、総合リハビリテーションセンターを利用されている方や、臨床現場、在宅の福祉用具ユーザーの方等の意見や評価を参考に、製品化に向けて関係機関の方々と取り組んでいる研究があります。今回はいくつかを紹介します。

## ～摂食嚥下障害の方の食事姿勢補助用具～

研究第2グループ 非常勤研究員 前田 悟

### ①頭頸部姿勢計測装置と誤嚥予防枕……………特願 2012-013870

#### ■特徴

脳卒中や高齢者の誤嚥予防には頭頸部調節が有効です。製品化を目指している、システムの概要は

VF検査(嚥下造影)時の頭頸部姿勢を定量的に計測。

計測データから個人専用の嚥下しやすい枕を作製。

誰でも、枕を置くだけで食事時の誤嚥予防が可能です。



#### ■製品化に向けて

頭頸部計測装置はVF検査での使用評価を、誤嚥予防枕は病院内での臨床評価を行い、製品化を目指します。

### ②傾斜角度検出報知機……………登録実用新案 第3173343号

#### ■特徴

病院では症状により、ベッドの背上げを行っています。背上げ角度をギャッチ角度と呼び、必要な30、45、60度を目視で調節すると10～20度低くなることが分かりました。開発品は持ち運びに便利なポケットサイズの大きさでギャッチ角度(30、45、60度)を音と光で知らせます。



#### ■製品化に向けて

企業との交渉を通じて製品化を目指しています。

## ～短下肢装具をすばやく脱着できるように～

主任研究員 兼 研究第2グループ長 赤澤 康史

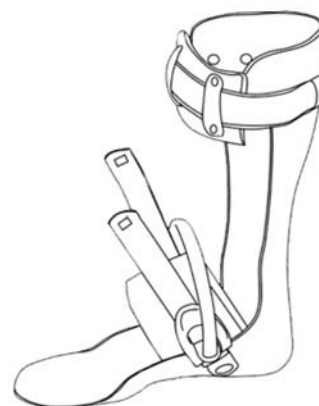
### 装具締着具……………特願 2011-202469

#### ■特徴

屋内専用、つまり上から靴を履かないことを前提にすれば、ずっと履きやすい装具を考える余地が生まれます。今回、その一例を具体的に提案・試作し、実際に片麻痺の方に試していただき、従来より短時間で履ける、そして脱げることを確認しています。

#### ■製品化に向けて

夜間のトイレ移動時などに使用できる装具をめざして、県内の靴メーカーに打診を始めたところです。





## 認知症介護の本質を問う研修

福祉のまちづくり研究所 開発指導員 小椋 智子  
 兵庫県認知症介護指導者 新村 邦素  
 兵庫県認知症介護指導者 三好 忠行

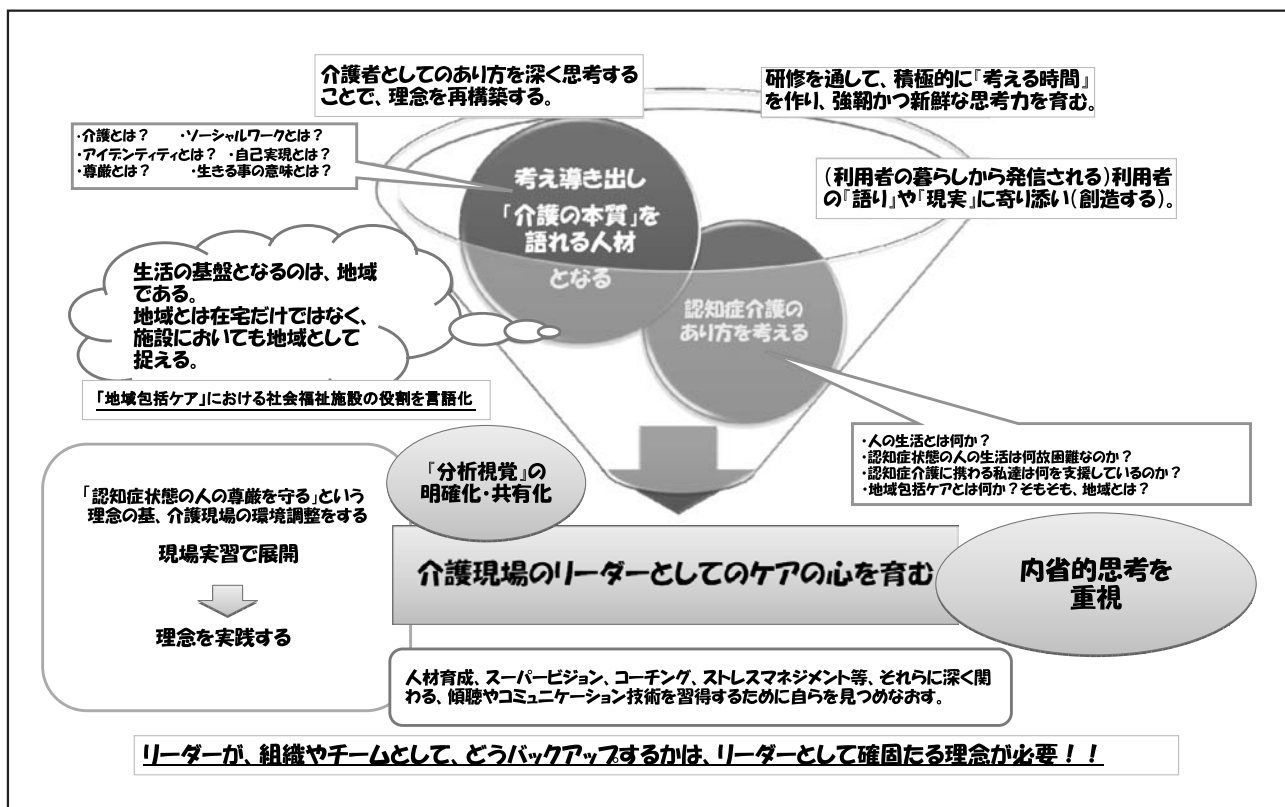
### 認知症介護実践研修（実践リーダー研修）の課題

認知症介護実践研修は平成13年度から展開されている「痴呆介護実務者研修」の内容を見直し、次の時代の認知症介護をめざすべくすめられ、都道府県及び政令指定都市を実施主体として全国的に展開されています。

認知症介護実践研修（実践リーダー研修）では、現場の課題を抽出し「できていないこと」をアセスメントし、「対応」を考え、「現場のリーダー」としての責務においてケアの改善を試みることを中心に研修を展開してきました。しかし、当研修のカリキュラムは「修了者の認知症ケアの能力向上にはつながらない」との見解が認知症ケア学会にて発表されました。（H22年認知症介護研究・研修東京センターの調査）

兵庫県では、この調査結果を踏まえ、認知症介護指導者とともに当研修カリキュラムの内容強化を検討し、新たな研修の展開に取り組みます。

### 認知症介護実践研修（実践リーダー研修）の展開における着眼点



### 認知症介護実践研修（実践リーダー研修）の目指すこと

認知症介護を語るとき、「高齢期を生きる人」の理解が不可欠です。誰もが、人生の終盤には高齢期を迎え、高齢期の発達課題【E. H. エリクソン：老年期の発達課題】に直面します。「現在を生きていることの重要性」と同様に、「生きてきた時間の重要性」や、「その人にとっての意味を知る

こと」が重要となります。高齢者の持っている時間の重さを考えて接するとき、私たちが忘れてはいけないことは高齢者が長い年月を生き抜いてきたことに対して敬意を持つということです。

こうして、人が生きるということ、高齢者に敬意を持つということを前提に、認知症状態の人のケアを考えます。まず「認知症ケア」とは「認知症状態にある人に対する関わり」であり、認知症を注視するのではなく、その本人への理解を深め、「その人がその人らしく生きるための関わり」であるということを理解します。「認知症状態」という状態像の正確な理解と様々な症状や個別性を客観的に捉え、特別なのは「認知症という状態」でありその人自身は普通の人であるという事を捉える必要があります。

そして、「介護」とは、対象者の障がい・疾病の有無や「介護をする、される」で人間関係を区別するのではなく、個人に認められる権利を認め、尊重し合うこととを基盤に関係性を持つことと考えます。このような、介護理念を自分自身で考え、実践できる人材がこれからの高齢者福祉に必要な人材となると考えます。

私達は、ケアの心を育み、創造力があり、過去の形に囚われず、その人にあった関わりが持てる人の育成を試みます。また、人口減少時代を支える地域包括ケアのあり方を考察し、生活課題により生活に困難を抱えた人を支えることのできる人材の育成を目指します。

\* H24年度の認知症介護実践研修（実践リーダー研修）実施の詳細は当研修センターホームページに掲載しています。

## 福祉用具三二講座

### 福祉用具展示ホールに展示してある車椅子についての説明をする前に…

「椅」が常用漢字表に追加されたことにより、厚生労働省の告示等が「車いす」「電動車いす」「座位保持車いす」から「車椅子」「電動車椅子」「座位保持車椅子」と表記されるようになっていきます。

使われる際の機能面に関わる変更ではありませんが、ひらがな表記になると文面によっては読みにくい場合もありますし、常用漢字は『一般の社会生活』で使われる漢字の目安として示されていますので、公文書等に「椅子」と表記できるようになったのは、大きな変更であると考えられます。

福祉用具展示ホールに現在展示されている車椅子についてですが、50台を超える台数に上ります。自走式車椅子、介助式車椅子はもちろん、足こぎ式の車椅子や立ち上がると自動でブレーキがかかる車椅子といった、あまりみかけることが少ないタイプの車椅子も展示しています。

また、狭い室内での使用に適している6輪車椅子は、複数のメーカーのものを展示して試していただけるようになっています。

カタログやパンフレットをみるだけでは機能面でわかりづらいこともあるかと思えます。

福祉のまちづくり研究所 家庭介護・リハビリ研修センター課のホームページ<http://www.hwc.or.jp/kensyuu/> をみていただくと、福祉用具展示ホールに展示してある福祉用具がすべて掲載されていますので、試したい車椅子がある場合は、1度ご連絡いただければと思います。



福祉のまちづくり研究所 開発指導員 柳谷 博之

福祉のまちづくり研究所1階に福祉用具展示ホール・介護実習室・研修室、敷地内にウェルフェアテクノハウス神戸があります。家庭介護・リハビリ研修センター課はこれらの施設を使い、「研修」「展示」を事業の両軸に運営しています。

### ■ 研 修

福祉や介護現場の質の高い人材育成を目的に、実習を多く取り入れたプログラムを実施しています。また認知症介護や障害者支援の研修では、講義、演習、レポート、実習などのカリキュラムを通じて、受講者が支援のあり方を主体的に学ぶことを目指しています。



褥瘡予防のケア研修



起居・移乗動作の基礎講座



認知症介護実践研修

### ■ 展 示

福祉用具展示ホールには約1,200点の福祉用具を展示しており、実際に試すことができます。テクノハウスでは家の中での介護・福祉機器の体験が可能となっています。福祉用具や住宅改修のための相談も受けています。



展示ホール入口



車いす展示コーナー



テクノハウスウェルフェア神戸

■通常の展示以外に福祉車両などの展示を行うイベントや、広く一般の方に福祉用具に親しんでいただくための体験学習、企業や既存施設のバリアフリー整備への助言など、地域におけるリハビリテーション活動をさまざまな方面から支援しています。



玉津どきどきフェスティバル2012



高齢者疑似体験



車椅子体験学習



## 家庭介護・リハビリ研修センター課のホームページがリニューアルしました!

一部の研修は、ホームページから直接申し込むことができるようになりました。研修・イベントの最新情報や福祉用具展示ホールの福祉用具もご覧になれます。是非ご活用ください。

福祉のまちづくり研究所 家庭介護・リハビリ研修センター課    
 アドレス：<http://www.hwc.or.jp/kensyuu/>

## アシステック2012(研究成果発表会)開催



去る5月25日(金)、当研究所のセミナー室において、アシステック2012を開催いたしました。前年度をもって終了した研究の成果発表会で、ひょうごアシステック研究会の企業会員の方をはじめ、大学、福祉医療関係者等60名の参加がありました。「iPad touchやiPadを活用した知的・発達障害児のコミュニケーション支援にかかわる研究」、「高齢者・障害者の個別ニーズに対応した福祉用具等の開発」など6テーマの発表のほか、播磨町等で施行した乗換誘導シートなどの研究成果物の展示を致しました。

### 平成23年度報告集発行



前年度取り組んできた研究内容を1冊の報告集にまとめています。ご希望の方は当研究所企画情報課までお問い合わせ下さい。

### 企画情報課スタッフ紹介

情報をよりタイムリーに、研究所の取り組みをより分かりやすく伝えていきたいと思っております。



課長 水口信宏      課長補佐 後田耕司  
事務補助 田中亜由美

### 平成24年度ひょうごユニバーサル社会づくり推進大会・第20回福祉のまちづくりセミナーのご案内

日時 平成24年7月31日(火) 13:30~16:40  
場所 兵庫県公館(神戸市中央区下山手通4-4-1)  
内容 ひょうごユニバーサル社会づくり賞 贈呈式 ほか  
記念講演  
「支える側が支えられるとき~認知症の母が教えてくれたこと」  
詩人・児童文学作家 藤川幸之助 氏

参加費 無料

\*認知症の方の生活を支える福祉用具の展示会も予定しています。

### ロボットリハビリテーションセンター公開シンポジウム

日時 平成24年8月5日(日) 14:00~16:30  
場所 ニチイ学館神戸ポートアイランドセンター  
(神戸市中央区港島南町7-1-5)  
テーマ 最先端技術を生かしたリハビリと障害者の社会参加  
参加費 無料  
\*筋電義手、コンピューター制御義足、プロプリオフットなどの展示も予定しています。  
(お問い合わせは、リハビリ中央病院 経営企画課まで)

TEL.078-927-2727 (内線 2222)

### アシステック通信

第66号(平成24年7月)

【編集・発行】  
社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団  
総合リハビリテーションセンター  
兵庫県立福祉のまちづくり研究所

〒651-2181 神戸市西区曙町1070  
TEL 078-927-2727(代) FAX 078-925-9284  
<http://www.assistech.hwc.or.jp>



「節電の夏」真っ盛りです。暑さは辛いですが、ムダが多かったこれまでの生活を見直し、エコロジーでエコノミーな生活を送る良い機会だととらえて前向きに頑張りましょう。でも健康第一、無理をしないでエコな生活を送りましょう。